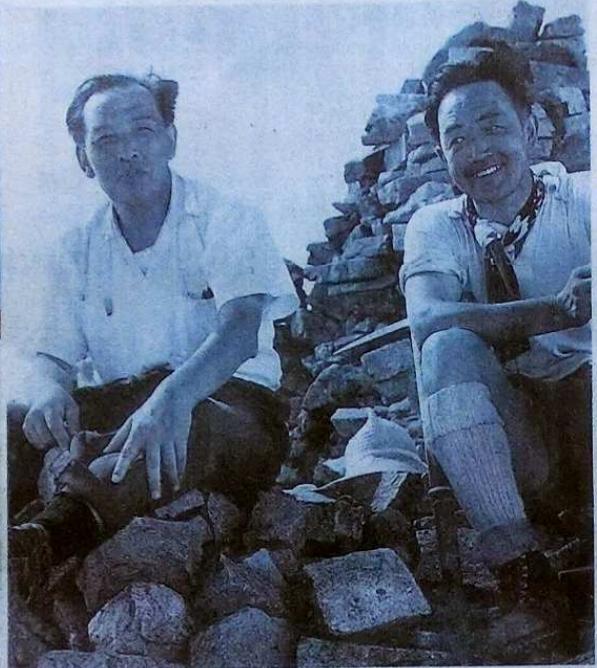
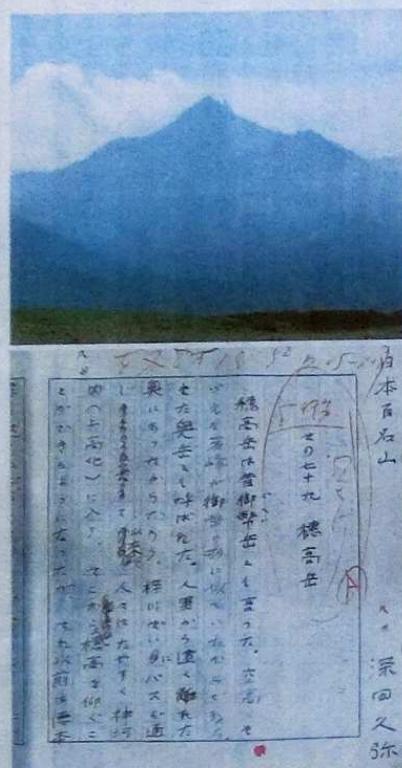


# 真摯に向き合い「山格」みる



◎日本百名山の北アルプス・笠ヶ岳山頂での深田久弥（左）と画家山川勇一郎=1957年ごろ、「深田久弥 山の文化館」提供（写真）  
●頂の雲がとれた利尻岳  
○日本百名山「穂高岳」の原稿

雲に包まれた利尻岳山頂に立つと、北海道・利尻島の真ん中にあることも、1700倍超の高さも忘れてしまう。

5時間かけて登り詰めた十数人が頂の看板と祠の横で、写真を撮っていた。東京都青梅市の68歳と65歳の夫妻は、50年近くかけて「日本百名山」の90を超える峰々を踏破してきた。妻は「百名山」一つの文章と同じように、山には味わいがあり、登頂時の達成感は最良の思い出です」。

作家深田久弥（1900-71）の著書「日本百名山」は、1964（昭和39）年、新潮社から刊行された。

その4年前に、深田は利尻岳の頂を踏んだ。そのときも、「海洋の気流が頂上にぶつかって……絶えず湧かせている雲」に山頂は覆われた。

しかし、「島全体が一つの頂

の姿勢は百名山を選ぶ時

定基準は、50年近い登山歴を

十勝岳・大雪山のほか、礼文岳などにも足を運び、翌年に梅市の68歳と65歳の夫婦は、50年近くかけて「日本百名山」の90を超える峰々を踏破してきた。妻は「百名山」一つの文章と同じように、山には味わいがあり、登頂時の達成感は最良の思い出です」。

作家深田久弥（1900-71）の著書「日本百名山」は、1964（昭和39）年、新潮社から刊行された。

その4年前に、深田は利尻岳の頂を踏んだ。そのときも、「海洋の気流が頂上にぶつかって……絶えず湧かせている雲」に山頂は覆われた。

しかし、「島全体が一つの頂

の姿勢は百名山を選ぶ時

定基準は、50年近い登山歴を

昭和39年  
(1964年)

明治

大正

昭和

平成

日本百名山



連載完結まで23年

深田久弥が「百名山」を着想したのは戦前で、1940年、雑誌「山小屋」に「日本百名山」のタイトルで、20の山を10回連載した。37年、朝日新聞に小説「錦倉夫人」を連載し、新進作家として認められた時期だった。

高辻謙輔さんによると、43年にも「文学界」に「日本の名山」と題する連載を始めるが、3回で終了する。「名山について、まとめようと検索していた様子がうかがわれる」と高辻さんは語る。「山小屋」の中止から、戦後、「山と高原」で連載が完結するまで23年かかった。

「日本百名山」は新潮社と朝日新聞社から出版され、新潮社版だけで累計64万4千部売れている。

## 幅と奥行きのある文学



大森久雄さん（81）

「日本百名山」の編集者

私が「日本百名山」を編集することになったのは、1958年に「別冊文芸春秋」に掲載された深田久弥さんのエッセー「混まない名山」を読んだのがきっかけです。そこには「日本百名山を選んでみよう」という考え方記されました。私は25歳で、出版社「朋友堂」の月刊誌「山と高原」の編集者でした。深田さんは小説家であり山の経験も豊富。二つを融合すれば、いいものが出来ると考えました。

「山と高原」59年3月号から毎月2山ずつ、4年2ヶ月にわたって連載しました。1山400字詰め原稿用紙5枚の分量。内容が充実し評判がよく、もう少し長く書いてほしいと深田さんに頼みました。すると「これ以上長いと文章がだれる」と即座に断られました。

深田さんは選筆で有名でした。文献を調べ、文章を練り、たいへんなエネルギーをかけていたのだと思います。あす印刷というのに、原稿が入らない。頭の中が真っ白になりましたが、奥さんは「明日来て下さい。必ず渡します」と言います。奥さんが原稿の進み具合をつかんでいたのです。休載は一度もありませんでした。

「日本百名山」は羅列的な記録ではなく、深田さんの山歩きの幅と奥行きが独自の世界をつくり、文学として結実したものです。山を一步踏みしめるように、読者のみなさんは「日本百名山」の世界をかみ締めてほしい。

◇次回は「省エネルック登場」の予定です。